林業技術センター
普及班便り
（第62回）

いわての林業人41

一　はじめに

今月の普及班便りでは、岩手の特用林産の担い手として、軽米町で原木シイタケ栽培に取り組む菅原敏見さんをご紹介します。

菅原敏見さん（奥中央）原木シイタケ研修講師の様子

二　参入のきっかけ

菅原さんは現在54歳。平成25年4月に約30年勤めた役場を退職し、父の後を継ぎ原木シイタケ栽培に本格的に携わるようになりました。数年前には経営委譲を受け、勤めのかたわら栽培をしてきましたが、作業面では専ら父に頼ることが多く、繁忙期や休みの日に手伝うことが主でした。「実際に一から十までシイタケの作業をしてみるとやっぱり大変だと感じます。でも年齢的には良い時期に栽培を引き継いだと思っています。

風評被害で厳しい時になぜ経営を引き継ぐことを決めたのかと聞かれますが、定年まで勤めた時の父の年齢を考えると、今のうちに現場のノウハウを学んでおいたほうが良いと考えたからです。

風評被害もいつかは必ず終息するだろうから、今頑張って続けていれば将来的には十分経営は成り立つと思っています。消費者の理解が進めば、再び安全・安心な原木シイタケが認知されると考えています。」

（菅原さん談）

三　栽培方法

原木は地元の山を立木購入し、元・森林組合の作業班の方に委託して伐採しています。植菌は冬季から春先にかけてハウス内で行い、そのままハウス内でビニール被覆仮伏せを行っています。

6月下旬から7月上旬にかけては、小～中径木は、暖かく、風通しの良いマツ林に本伏せを行っています。

同地は気温の低い地域であることから、「ホダ木作りが難しい」とのこと。また、年間降水量が１０００ミリ程度しかないので、乾シイタケ栽培を行う上で、単収アップに欠かせないのが散水管理とのことです。

ホダ場は、１５０基のスプリンクラーを設置していますが、水源が近くにないために１５００メートル（高低差１２０メートル）離れた川から一旦ため池への中継を挟むかたちで、10馬力のタービンポンプ2台で揚水しています。

以前は、有孔ポリ被覆も行っていましたが、現在はそれに代わり成長促進散水を行っています。収穫時、乾燥気象が続くときには、きのこの傘表面に亀裂が入らないうちに、一日の収穫が終わる都度15～30分程度の散水を繰り返し、採り遅れにならないように細心の注意を図りながら、巻込みが全開しないギリギリのところまで開かせて収穫しています。

また、乾燥機は菌興式Ｃ－60型6台とＴＣ－45型1台（全自動）を所有するほかに、乾燥効率を上げるために自作の仕上げ用乾燥機を使用しています。

四　おわりに

出荷先は、主に系統と直売で、それぞれ出荷物の規格を変えているそうです。また、自分が手を掛けたホダ木からたくさん出た時や、お客さんから「おいしかった」と言われた時は、「やって良かった」と思うそうで、時に「お客さんから頂く御礼の手紙も、嬉しいものだ」と話していました。今後も、やる気と工夫にあふれた栽培で、岩手のシイタケの良さを広めてください。

林業技術センター普及班
０１９（６９８）１３３７

ハウス内仮伏せ